



海外から 研修員に聞く



オマール・キヤルキャビさん (モロッコ王国)

Mr. Omar Qarqabi
モロッコ王国農業開発・海洋漁業省
教育・研究・開発局
ケミセット県マジブ普及センター長
JICA帯広「低投入型農業生産管理システムコース」
(2005年7月24日～11月5日)で研修

▶ 「ラマダーン」月でしたが

インタビューした昨年10月30日はイスラム暦で第9番目の月「ラマダーン」にあたった。この月、ムスリム(イスラム教徒)は現世の仕事や遊びより祈りや精神的な修養により時間を費やすことが求められ、信仰を表す祈りの一つの形として暁から日没まで断食(サウム)を行う。

敬虔なムスリムであるオマール・キヤルキャビさんはこの日もサウムの最中であつた。「ラマダーン期間であるにもかかわらずインタビューの時間をとって下さって感謝します」とお礼をいうと、「まったく問題ありません。馴れていますし、国のことなどを話せるのは私としても嬉しいですよ」とにこやかに応じてくれた。穏やかでやさしい紳士であつた。

▶ 低投入型農業とは

今、北海道でも、低いコストでより安全な農産物を生産しようというクリーン農業を目指している。これは化学肥料や化学農薬の使用を抑え、環境への負荷が少ない有機的な農業技術の実用・開発を進めるもので一般に低投入型農業と呼ばれる。オマールさんが今回参加したJICAのコースは、各国それぞれに適した低投入型の農業生産システムや管理について研修するもので圃場の環境分析から農業機械の使用まで幅広い内容を網羅している。

オマールさんがセンター長を務めるケミセット県は首都ラバトから内陸に90kmほど入った地域で小麦やブドウ、ジャガイモ、豆類などの野菜を栽培している。「地味は良いのですが、年間降水量が350mmと少ないのでダムによる灌漑をおこなっています。収穫を上げようとするついでに肥料をたく

さん使ってしまうので、今回学んだ新しい技術を自分の地区の要望にあわせながら、農業生産者にもアドバイスをしていきたい」と抱負を聞かせてくれた。

▶ 陽沈むマグレブ(*)の国、モロッコ

モロッコと聞いて、映画好きならば幾つかの名作を思い起こすかもしれない。アフリカ大陸の西の角、ちょっと地中海を渡るとスペインである。

国土面積44.6万平方km、西サハラ地域を除いて日本のおよそ1.2倍だが、大西洋に面した海岸線が3550kmになるという細長い国である。

「日本の人はモロッコという砂漠ばかりの国というイメージを持っていると思いますが、そんなことはありません。南北に長く、中央に高い山脈が走っているので山脈の西側は農業地帯から海に続き、東側は砂漠とオアシスと、様々な景観が楽しめますよ」。意外に思えるが山間部にはスキー場もあるそう。また、歴史の古い国なので、フェズ、メクネス、マラケシュなど多くの古都、遺跡にはおおぜいの観光客が訪れている。1956年、フランス保護領から独立。学校教育にはアラブ語、フランス語、スペイン語が用いられている。

約3か月を過ごした帯広市について、「緑が多く、静かで、気候も穏やかで気持ち良く過ごせました。幾つかの行事に参加して人々と親しめたことも楽しかったです」と十勝滞在を楽しんだ様子であつた。

(通貨) ディルハム(DH)。9.5ディルハム=1米ドル(約100円)。(公用語) アラビア語。フランス語もよく通じる。

(*)モロッコ、アルジェリア、チュニジアの3国の総称で古くはベルベル人の故地。ベルベル人は、北アフリカの広い地域に古くから住むコーカソイドの民族のひとつで、現在も一定の人口と文化の独自性を保っている。



14世紀に建てられた神学校、「ブー・イナニア・マドラサ」。壁面の彫刻やタイルの幾何学模様が素晴らしい



モロッコ最古王都、フェズの門



ゆったりした長衣カフタンと革靴のバブーシュを履いて



寄せ木細工の技(モロッコ政府観光局ガイドブックより)

北海道内の国際協力・国際交流団体から 地域の活動

励ましのサッカーボール届けました

～大津波で家族、兄弟姉妹を失った子どもたちに～

札幌の市民団体「TSUNAMI 留学生帰国支援・北海道」(代表 大井わこ)はインドネシア、アチェ州の子どもたちに善意のサッカーボールなどを配ってきた(「であい」前号で特集)。

昨秋、この団体ではインド洋大津波から1年目の12月26日をめぐって被災したアチェの子どもたちにサッカーボールを贈ろうと呼びかけたもので2306個のボール等が集まった。これを、地元バンダ・アチェ市のNGOの協力を得て、年末から新年にかけて子どもたちに手渡してきた。詳しくは、「TSUNAMI 北海道」のブログ、<http://genkihkd.exblog.jp> にお礼と報告が載っている。

(写真提供:北海道大学大学院 ルビス・アフマッド・ヒダヤットさん)



左:「サッカーボールをもらいました」。アチェの少年
中上:小型トラックにボールを移し替える大井代表たち
中下:メダン港からでこぼこ道の続く中をバンダ・アチェ市までボールを運んだ
右上:地元NGOの事務所を占拠したかのような山積みボール
右下:被災者の住宅地区、子どもたちの手に渡った北海道からのサッカーボール
(2005年12月末)